

*Ayako Mizuo, Maternal / Material
Effects Through Language: A Feminist
Reading of Virginia Woolf's Novels.*

森 晴 秀

英宝社、2004、viii, 191p.

いい書物が出た。著者は本学1991年度学部卒業の水尾文子さん。留学したイギリス、ローボロー大学に提出、2001年に文学博士の学位を授与された。

ヴァージニア・ウルフの研究は欧米でも日本でも、現在ではずいぶん多くの仕事単行本の形で刊行されており、学術誌のモノローグは当然数え切れない。初期の評伝から始まり、昨今の極めて多くの方法論にいたるまで、ウルフもかなり論じつくされたかとも思えるなかで、この書物は眩いばかりの光を放つ。以下、若干の身びいきの誹りをおそれずに、簡単に紹介しておく。

表題に見るとおり、これはフェミニズム理論を援用したウルフ小説の解読である。

とりわけ社会的文脈の中での母親の身体性が如何にテキストの言語に表象されているかを実証的に究めようとする新鮮な試みである。

1980年代から90年代初期のウルフ研究の主流はフェミニズム理論に立脚するものであったが、著者にはそれを再考しながら更に深化、拡大しようとする意図がうかがえる。しかし、ここで一旦断っておかねばならないことがある。すなわち、当時の流行を追うものの中には、フェミニズムをあたかも錦の御旗よろしく振りかざすのみで、その議論は外国の受け売りどころかよく理解すら出

来ておらず、最も重要なテキストと、すなわち、特定の作品の言語やその深層とは繋がらないようなお粗末なものも少なくなかったことである。1例のみを挙げれば、Pamela J. Transue, *Virginia Woolf and the Politics of Style*. (State U. of NY Press, 1986) がそれだ。彼女によれば、「フェミニズムの伝統から見た『ジェイコブの部屋』の重要性は、作者がここで伝統的な小説の制約と決別し、内省的で、非直截的、非権威的、非規範的に現実を見る明らかに女性的な観点を得た点にある。・・・終局的にトレードマークとなったあらゆる技法を作者が開発し、多角的視点の使用によって全知全能の語り手の地位を捨てた。・・・このように文体の男性的な伝統を破棄したことが小説史上の転換点を示す」というものだ。しかしこれはなにもウルフに限ったことではない。ブルーストやジョイスにも当てはまることであって、新しい理論にのぼせ上がった著者の視野の狭窄を露呈する以外のなにもものでもない。

同じ理論に立脚する仕事でも、本書ははるかに優れている。例えば、第1章では、ボーヴォワール、フロイド、ラカン、クリステヴァなどの理論の概観から始まり、イリガライのフロイド、ラカン批評の分析とその可能性と限界を指摘するまとまった論考であり、著者の目は覚めている。この方面での先行研究はまだ出ていない。

第2章は、ウルフの自伝、エッセイなどを中心に扱う。20世紀初頭のウルフの「性的差異」に関わる考え方は、当時の社会、文化、歴史というコンテクストにおいて創生されたものであることを証明する。その文章は明快で、説得力に富む。

第3章は本書の白眉だ。 *Voyage Out, Mrs. Dalloway, The Waves* に関する肌理細かい論証である。 *The Waves* のローダをめぐる考察の一端に触れておく。

クリステヴァが提唱したセミオティックの理論のパラダイムが、これまでのウルフ批評の根底にあったが、著者はそれを一步前進させる。ローダには女性としての身体的実体がなく、彼女が存在するのはその体の外部においてであり、彼女自身が "nobody" (体がない、と読める) であって、伝統的男社会のアウトサイダーだと感じていることでも分るとおり、彼女は身体的に感知不可能な

存在と考えられてきたのであるが、実はそうではない。彼女はその反面、水溜りを渉るのに「身体的な苦痛」を感じている。この点に注目した著者は、作者がローダという人物を通じて、自分自身の身体的苦痛を勇気を出して語っているのではないかと推測する。当然ローダは、自分のアイデンティティに関しては不安定な判断しか出来ないことも自覚しているので、ここでは正確で断定的な結論を引き出すことはある意味では難しいのだが、それにしてもこれは新しい指摘に違いない。

いずれにせよ著者は、そして本章では特に、テキストの深層構造についての解釈を、議論を空転させずにテキストの言語の表層にも密着させて着想し実証を進めるので、理解しやすいのはそのためである。

第4章では、*The Years*や*Three Guineas*における母親の身体性に関する論考が、前章に劣らぬ的確さで進められている。

本書のように理論面でしっかりした書物は、他の作者の場合も同じだが、わが国で出版されることは稀である。そこで少し注文がある。日本の初学者のために、いくつかの特定のパッセージを決め、それらを例えば、クリテヴァ、ラカン、あるいはイリガライなどの論法によれば、どのように異なった解釈が可能になるかといったことをテキストに即して教えることの可能な書物を、次には日本で著していただきたいということである。また、折角の英語版でも、日本の出版社のほぼすべては、それを海外の書店に配本する実力を持たないことも念頭におき、今後は出版の形態と場所にも配慮されたいということ。さらには、これは評者には到底出来ないので、過剰な提案だが、批評理論は海外のものが絶対的に優れているというわけでもない。土居光知『文学序説』のように、日本人だからこそ可能な方法もあるはずだ。外国崇拜はこのあたりで中断し、何か全く新しい方法論を生み出して欲しい。それを特に新進の研究者に求めたいのである。この書物の書評をしたいと願い出たのも、ついでにこのことが書きたかったからに他ならない。

(もりはるひで)